

長雨・日照不足

7月

水 稲

1 早期水稲

①水管理

中干しが十分にできていない水田では、穂ばらみ期まで下位節間が伸びすぎないように適切な間断灌水に努める。

②穂肥の施用

生育が遅れている場合は、穂肥の施用適期を生育状態を見て判断するとともに、葉色が濃い場合は穂肥を減肥する等の適正施用に心掛ける。

③病虫害防除

葉いもちの多発が懸念されるので、発生ほ場では早急に防除するとともに、常発地域では発生に注意し、粒剤などによる予防措置を検討する。

2 普通期水稲

①水管理

間断灌水を実施し、分けつの発生促進に努める。

②病虫害防除

葉いもちの多発が懸念されるので、常発地域では発生に注意し、粒剤などによる予防措置を検討する。

大 豆

既に播種あるいは移植しているところでは、滞水すると発芽不良や根腐れが発生するので、排水を徹底する。

一方、播種あるいは移植できていないところでも排水を促進し、雨が上がり次第、土壌条件が適当な時を見計らって早急に播種あるいは移植する。

黒大豆の育苗で苗が大きくなりすぎる懸念がある場合は摘芯等を行い、徒長を抑制する。

播種あるいは移植が大幅に遅延するところでは、遅延程度に応じて株間を狭めて密植する。

茶

長雨が続き、滞水すると根腐れが発生し、また、雨上がり後の干天で「立枯れ病」が誘発されやすいので排水を徹底する。

また、曇雨天が続くと輪斑病、炭疽病が多発しやすいことから、2番茶後には輪斑病の防除、3番茶後には炭疽病の防除を徹底する。

野 菜

1 滞水すると根腐れが発生しやすいので、溝、畦間、明渠の排水を徹底する。

また、べと病、灰色かび病、炭疽病等の被害が拡大しやすいので、病葉や病株を早期に発見し、除去・ほ場外へ搬出するとともに、雨の間の晴れた日に防除暦・防除指針に従い、適期防除に努める。

2 施設野菜では、雨の後に晴天になると、急激な根の水分変化に対応できないため、極端な萎れや生長点等の焼けが発生しやすくなる。萎れ、生長点等の焼け防止のため、雨の日でも土壌水分を確認し乾燥しているようであれば、午前中に適量かん水を行うとともに、施設を閉め切らず、サイドや入り口を開放して風通しをよくし、多湿状態にならないように管理する。雨天後の晴天日は、早朝に適量のかん水を行うとともに、施設内の温度が急激に上昇しないよう、早朝、7時ごろから徐々に、サイドや谷等を開放する。また、施設周りに排水溝を掘り、施設への水の流入防止に努める。

3 果菜類では、曇雨天が続くと開花、結実がスムーズに進まない。草勢が弱りやすいので、摘花や摘果等を行い、着果負担を軽減し、葉面散布剤を散布し、草勢回復に努める。

4 露地栽培のほ場準備では、ほ場の乾きが悪く水がたまっている場合は、ほ場全体の耕うんはせず(耕うんすると土壌に水を含み一層乾きにくくなる)、排水溝を設置して(約5mおきの溝、ほ場周りの溝、落とし口とつなぐ溝等)積極的な排水対策を行う。落とし口周辺だけでも溝を掘ると排水しやす

くなる。耕うん可能なほ場条件になってから、耕うんし、うねはできるだけ高うねにする。すぐに定植しない場合は、基肥を施用してマルチングをすると雑草防止、土壌表面のしまりを防止できる。ほ場周りに排水溝をほり、うねが30m以上になる場合は中溝をつくるなど排水対策を行う。

- 5 定植後、活着を促すために株元かん水を行う。栽培中のかん水は土壌に十分水分を含んでいる場合、水分過多になると徒長気味に生長し、根の張りが悪くなるので、土壌水分が多くならないように土壌水分を確認しながらかん水を行う。
- 6 育苗管理では、育苗培土の湿りを確認し、午前中のかん水を実施し、夕方、育苗培土が乾き気味になるようにかん水を行う。

果 樹・オリーブ

1 露地栽培

- 1) 成熟期が近いモモでは、不必要な徒長枝を剪除し、樹冠下に反射マルチを行うとともに、園内の排水に努めて増糖、着色を図る。
- 2) ブドウ、キウイフルーツは果実の発育が盛んな時期にあたるので、不要な徒長枝や副梢をかぎとり、果実の肥大を促す。特に過繁茂に注意する。
- 3) 病害の多発が懸念されるので、防除歴に従って次の防除を徹底する。
モモ、スモモ …………… 灰星病
ブドウ……………べと病
カキ……………炭疽病
オリーブ……………炭疽病

2 施設栽培

- 1) 果樹類の光飽和点は40,000ルクス程度であるが、雨天時は10,000ルクス程度なので同化養分量の不足が起こっている。
特にハウスでは更に20%程度の光がカットされるので、次の点に配慮する。
① 不要な徒長枝、副梢をかぎとる。
② 雨天時以外は換気に努める。
③ ブドウでは過繁茂状態を防止するため、結果枝の間引きも考慮する。
- 2) 成熟の段階に応じて過灌水に注意する。
- 3) 病害の発生は露地栽培に準じる。
- 4) 雨天後、晴天になると、急激な高温による生理障害の発生が心配されるので、十分な換気 に努める。

花 き

1 施設内管理

- 1) 昼間は、十分に換気を行う。雨天時には、換気扇による換気、温風暖房機による間断送風等（送風のみで加温はしない）を強制的に行う。
- 2) かん水は、必要最小限に止め、こまめに行う。また、株元にかん水し、植物体に掛けないようにする。
- 3) 薬剤散布を実施する場合は、雨の間の晴れた日に行い、できるだけ早く薬液が乾くようにする。
- 4) 生育や商品価値に支障がない限り、下草や余分な枝は除去して、通風採光を図る。
- 5) 発病した部分ではできる限り除去し、直ちに施設外へ搬出して処分する。
- 6) 寡日照が続く中での晴天は、急激な温度上昇による葉焼け、茎折れ等を起こしやすいので、換気等により高温防止を図る。
- 7) 施設回りの排水を徹底し、内部へ水が入り込まないようにし、根腐れ防止に努める。
- 8) キク等で花芽分化の促進が予想される場合は、生育が衰えないような管理に努めるとともに、電照を平年より早くから始め、電照時間も2～3時間程度長くする。

2 露地管理

- 1) ほ場内の水は、排水溝を通じて外へ排出する。
- 2) 肥料の流亡が予想されるので、葉色等を見ながら追肥を行う。
- 3) 雨天の間隙をぬってでも、薬剤防除に努め、病害虫の多発を防ぐ。

畜産

- 1 湿度が高くなっているため、配合飼料及び乾草などの粗飼料のカビに気を付ける。カビのあるものは給与しない。
- 2 飼槽内の残飼が変敗しやすくなっているため、残飼の除去など、飼槽の清潔を保つよう努める。
- 3 畜舎内の湿度が高ければ、気温が低くても、家畜の体表面からの体温放出が機能しにくく、暑熱ストレスを受けやすいので、畜舎の換気（強制換気も取り入れる）を良くし、暑熱ストレスによる家畜の損耗軽減に努める。

飼料作物

- 1 ほ場内の排水に努め湿害を軽減したうえで、適期収穫を心掛ける。
- 2 トウモロコシでは、絹糸抽出期から受粉期に日照不足になると不稔が多くなる。さらに雨天が続く多湿になると、ごま葉枯病・根腐病などの病害や硝酸塩の蓄積が多くなるので注意を要する。
- 3 トウモロコシの収穫期は、絹糸抽出期から起算して35～40日程度であるが、長雨・日照不足の場合、これ以上の日数を要するため、雌穂の堅さやミルクライン等を観察して適期収穫を図る。
- 4 ソルガムは、高水分では良質なサイレージの調製が難しいので、乳酸菌等の添加剤を利用する。
- 5 硝酸塩の蓄積が懸念される場合は、できる限り青刈り給与を避けてサイレージに調製するが、青刈り給与が必要な場合は、事前に検査機関で硝酸塩濃度の分析を行い、適正給与量を判断する。